森のふくろうへの独言 Ⅷ

小田富英

届くか
わが無音の独言
聴けるか　翁の再生の詩(うた)

今を生きる小さ子の名言
ばあちゃん
どうして考えは止まらないの
もろ人の絶えずふみ行く道なれば
その昔　翁も
私の考えは汽車よりも速く
西へ東へ行ったり来たり
とつぶやいた

絶えずふみ行く道には
これもまた悲しみという名の列車が
行き来している
朽ちないでいるということが
もしあるとするならば
書の向こう側で嗚咽する
一人の男の真率な涙を
不朽にすべきと

手向けるやむしりたがりし
赤い花か白い蕾
これもまた歎きという名の列車が
かくり世とうつし世の間を
行ったり来たりする
もろ人が通ったとしても
歎きは共有できずに
過去はいつも個室寝台のなかだった

翁は
かへりて跡は残らざりけりと結ぶも
残らない跡を探すのに
躍起となっている現代人(いまびと)を笑うがいい
いつの日か悲しみも歎きも
小さ子らの乗る不朽の列車が
過去と未来の往復列車となって
穏やかなる大地に着地するはずだから